



地域と共に歩む 特別支援学校を目指して

県立印旛特別支援学校校長 やまざき ひろし
山崎 博志



1 はじめに

本校は、昭和55年に印旛郡市2市6町3村を学区とし、知的障害の特別支援学校として開校した。現在の通学区域は、佐倉市、四街道市、印西市（旧印旛村地区、旧本埜村地区）、酒々井町の3市1町となっている。平成24年には、県立佐倉南高等学校内に高等部普通科職業コースの「さくら分校」が開設した。今年度の児童生徒数は、本校の小学部、中学部、高等部、さくら分校を合わせて300名である。

本校の学校経営方針には、「地域の特別支援学校として、教育活動と特別支援教育のセンター的機能の充実を図り、その社会的役割を果たす。」を掲げている。地域の特別支援学校としての本校の取組を紹介する。

2 コミュニティ・スクールの導入

「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、今年度から学校運営協議会を設置した。今年度のテーマは、「地域の教育資源を活かした子供の学びを深めるための学校づくり」として、校長を含む15名の学校運営協議会委員の皆様の協力をいただきながら、学区を中心とした地域の人的・物的資源を活用した教育活動を行っていく。運営方法としては、年間をとおして、学校運営部会、学校支援部会、地域連携部会の3部会に分かれ、テーマに沿った協議等を行っていく予定である。5月に開催した第1回学校運営協議会では、学校運営方針の承認や令和5年度学校評価、令和6年度の学校運営協議会の運営等について協議した。



第1回学校運営協議会

3 交流及び共同学習の推進

学校近隣の小学校、中学校、高等学校の児童生徒との学校間交流や居住地区の学校との居住地校交流を行うなど、地域との交流を促進し、同世代の児童生徒との相互理解、相互交流を図っている。今年度の居住地校交流は、印西市では小学校1校と中学校2校、佐倉市では小学校7校と中学校2校、酒々井町では小学校2校と中学校1校、四街道市では小学校6校と中学校1校で、全体として、小学部が20名、中学部が8名の計28名の児童生徒が居住地校交流を行う予定である。そのうち、今年度新規の児童生徒は、8名である。



小学部と近隣小学校との学校間交流（Tスロー）

4 ユネスコスクールの取組

平成29年3月14日付けで、全国の特別支援学校で9番目に本校が正式にユネスコスクールとして承認され、今年度で8年目を迎えた。ユネスコスクールとして、地域交流や環境教育、防災教育、人権教育等、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組んできた。今年度もさくら分校では、ESDに取り組んでいる。自分たちが通っている学校は、持続可能な社会や、より良い未来の構築を目指すために地域の中心となって教育の場から様々な活動を推進していく学校であることを改めて確認した。現在、企業・佐倉市・市内高等学校等の産官学が連携した「さくら弁当プロジェクト」の活動にも参加している。今後も自分たちにできることは何かを考え、生徒たちがさらに主体的に取り組める活動にしていく。

5 地域との関わり

さくら分校では、各コースで地域や近隣の学校との交流を密に図っている。農園芸コースは、毎週金曜日に地域の公園2か所を回り、採れたての野菜・花を販売している。また、公式ラインを開設し、当日の販売情報や詳しい時間を伝えるようにしている。フードデザインコースでは、月に1から2回、佐倉南高等学校での生徒向け販売や本校（印西市）で販売を行っている。メンテナンスコースでは、近隣地域のゴミ拾い清掃、南部児童センターでの定期的な清掃の他、佐倉市内の小学校で児童と一緒に清掃体験の交流授業を行っている。また、地域の商店の皆さんと一緒にJR佐倉駅ロータリーの清掃活動にも参加している。なお、佐倉市では今年、市制施行70周年を迎え、去る2月8日に、市内の県立高等学校等5校（さくら分校含む）と包括連携

協定を締結した。10月には市制70周年記念式典を予定しており、さくら分校も展示会や販売会を行う予定である。



農園芸コースでの販売会（さくら分校）

6 県研究指定校としての取組

今年度、県教育委員会の研究指定校として、「一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程」のテーマの下、外部人材を活用した学習活動の充実について実践研究を行う。本校では、これまで中学部のコーヒー班、さくら分校ではフードサービスコース、農園芸コースで外部の委嘱講師を招聘している。中学部生活単元学習「目指せ！アウトドアの達人!!」では、平成28年度から近隣の大学と連携した自然体験活動に取り組んでいる。大学と連携し、野外教育研究の専門家や大学生との交流及び共同学習をとおして、授業の質を高めるなど、地域の外部人材を活用した取組を行っているところである。

7 おわりに

第3次千葉県特別支援教育推進基本計画の施策の中に、「地域で共に学び育つ教育の推進」が掲げられており、学校経営の充実を図るためには地域との連携・協働は重要である。今後も学校から積極的に地域との関わりを求め、地域と共に歩む特別支援学校を目指していきたい。



地域と共に歩む学校づくり ～学校と地域との連携・協働を 推進するための取組について～

市原市立戸田小学校教頭 さいとう みつりのり
齊藤 光紀



1 はじめに

本校は、市原市のほぼ中央に位置し、学校周辺には田畑が広がり自然豊かな環境にある。長年体育研究に取り組み、毎年実施している体育公開研究会は今年で95回目となる。近年は、歴史と伝統を大切にしながらもICTを活用した学習指導や校務の情報化にも積極的に取り組んでいるところである。

2 体育研究と地域連携

戸田体育は、不況や関東大震災により村全体が疲弊していた頃、当時の村長と校長が、村を蘇らせるためには、「豊かな情操と健全な心身をもつ志操堅固な人づくりが急務である」とし、体育を中心とした学校経営を、ひいては、学校を中心とした村づくりを進める必要があるとしてきたことが起こりである。本校は、これまで多くの先人たちの熱い情熱に支えられながら、様々な困難を乗り越え、学校・家庭・地域が手を携え発展してきた経緯がある。

近年では、地域住民の高齢化、子育て世代の他地域からの転入等により、学校への願いに変化が生じてきているものの、昔を知る地域住民は依然として学校への期待が高く、現在もこうした地域の支えにより学校運営が進められている。

3 地域と学校をつなぐ役割

教頭の校務の一つとして地域の関係団体や学校支援ボランティア等の連絡・調整がある。主な関係団体は次のとおりである。

(1)戸田小学校区小域福祉ネットワーク

本市では小学校区ごとに社会福祉協議会に

よる福祉ネットワークが設置されている。戸田小学校区小域福祉ネットワークでは、「高齢者部会」「環境部会」「子ども部会」の3部会が設置され、月1回情報交換を行い、学校の取組を発信したり、学校だけでは解決できない問題に対して支援を求めたりする場となっている。また、学校を含めた周辺地域の美化活動等も行い、学校を中心とした地域の活性化を担っている。



戸田小学校区小域福祉ネットワークの様子

(2)戸田地区民生・児童委員

子育て支援が必要な家庭について、年度始めに民生・児童委員と情報交換を行ったり、児童の様子を参観したりしている。また、長期休業期間中に気になる児童への見守り活動を依頼し、学校外における児童の健やかな成長を促すための協力体制を構築している。

(3)オレンジ隊

本校の周辺道路は、京葉工業地域に抜ける道として利用者が多く、登下校は大人が支援しないと児童だけでは横断することが難しい道路もある。オレンジ隊は地域の有志で結成され、児童の登下校の安全確保や見守り活動を実施している。毎日、児童の登下校の時間

に合わせた交通安全指導により、児童の登下校中の事故は発生していない。



オレンジ隊による朝の見守り活動の様子

(4) 戸田体操クラブ

戸田小学校を卒業した有志で結成された社会体育団体である。主に体育学習の支援を行っている。器械運動の補助や徒手体操への助言等を通して、体育学習を安全に行うための支援や児童の体力の向上に大きく寄与している。



戸田体操クラブの体育支援の様子

4 地域連携を進める上での課題とこれからの取組

(1) 担い手不足解消に向けて

地域の高齢化が進み担い手不足が進んでいる。先日もこれまで関わってきてくださった方から体調不良を理由に学校支援ボランティアを辞退するといった声が複数寄せられた。また、共働き世帯の増加や生産年齢の高齢化により、学校に関わるのが難しいといったことも少なくない。新たな人材を発掘するためにも関係団体や地域への呼びかけ等に積極的に取り組まなければならないと考える。

(2) 目的の共有、意識のすり合わせ

支援に対して熱心な方ほど、学校への要求が大きくなる傾向がある。学校としても、応えられることもあれば出来ないこともある。全ての支援者に目的の理解を求めることは難しいものの、関わる方に対して学校が目指すビジョンを丁寧に説明し、目的を共有し同じ方向を向いて関係を築くことが必要と考える。

(3) 中学校区コミュニティ・スクールの開始

本市では、令和4年度から順次、中学校区毎に小中連携によるコミュニティ・スクールを実施している。本校もその準備段階として中学校と連携しながら本格実施に向けて準備を進めているところである。各学校にある地域資源や人材を円滑に共有することができれば小中連携によるコミュニティ・スクールが確立され、地域間による連携や協働がより活発になると考える。しかし、「戸田小学校だから関わってきたが中学校は……。」という声もある。小学校卒業後の児童を地域全体で継続して見守ることを目的に地域連携の在り方を中学校区の学校間で検討し、取り組んでいくことが求められる。

5 おわりに

小規模の学校ほど地域の力を活用することは必要であり、地域の協力無くして学校運営は難しいものとする。地域の願いや想いに寄り添いながらも、学校の現状を正しく伝え、理解を得ながら連携・協力体制を構築することは教頭の役目とする。また、地域との良好な関係を保ち、地域が学校運営に参画していくためには、教頭が学校と地域の間に入りファシリテートしていく必要がある。学校と地域が互いに力を合わせた学校運営を通して、児童の成長をさらに伸ばせる学校を目指していきたい。



学校を動かす

チーム学校の一員としての 研究主任の役割

茂原市立豊田小学校教諭 **もり 森** **たかゆき 隆之**



1 はじめに

本校では、令和元年度から道徳科を研究教科として、授業のあり方を研究してきた。令和3年度に茂原市教育委員会から「ICT教育」の研究指定を受けたことにより、道徳科の学習活動の中で「どのようにICTを活用すれば効果的なのか。」を授業研究において検証することになった。当時、本校の中でタブレットを授業に活用した経験のある教員は少なく、私もその中の一人であった。また、タブレットの使い方や本校の道徳科の研究にICTをどのように生かすかなど、様々な課題のある中でスタートとなった。このような状況で、研究主任としてどのようにICTの活用について研究を進めてきたのかを紹介することとする。

2 ICT活用に向けた取組

(1) 学習活動におけるICTの位置付け

これまでの研究において、他者と意見を交流する中で多様な考え方に気付いたり、力を合わせて意見を追求することで学びを深めたりする協働学習（学び合う学習活動）を研究の中心に位置付け、授業実践に取り組んできた。しかし、児童の中には、自分の考えをうまく言葉にできなかったり、面と向かって友達に伝えることが苦手だったりする児童もいた。そこで、ICTを活用して学び合う学習活動を展開することにした。ICTの様々な機能を使えば、自分の考えをタブレット上で表現・整理・発信したり、友達の考えを共有した

りすることができる。実際、学び合う学習活動にICTを取り入れてみると、「意見を伝えやすい。」「いろいろな考え方を共有できる。」など、多くの児童がICTの活用を肯定的に受け止めていた。

道徳科は、「自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める」ことを目標としており、教材によっては自分の内面を知られたくない、伝えづらいということもあると考えられる。そのようなとき、ICTは学習活動を円滑に進めるための、有効なツールとして位置付けられることを共通理解した。



タブレットを活用した学び合う学習活動

(2) ICTを学習活動に取り入れるために

研究がスタートした当初、児童のタブレットの習熟度には大きな差があり、学習活動に支障が起きることもあった。そこで、児童の発達段階に応じたICT機器活用の目標を設定し、児童がタブレットに慣れ親しめるようにした。例えば、視聴覚主任が中心となり、学習活動に有益な学習ソフトを児童が共有でき

るようにした。児童は、昼休みにそれらの学習ソフトを使って、ゲーム感覚で楽しみながら学ぶことができた。また、ICT企業から外部講師を招聘して特別授業を行い、タブレットを使う上でのマナーや危険性、正しい使い方を指導していただいた。さらに、職員に向けた研修も行い、タブレットを使って授業実践する力を養った。

その結果、4～6学年の児童は、学習ソフトの操作やタイピングを、ほぼ自力で行うことができ、スムーズに学習活動を行えるようになった。1～3学年は、教員が送信したグラフにスタンプを押したり、大型テレビにワークシートを投影したりすることができた。このように、それぞれのICT活用の目標に沿った学習活動ができるようになった。

【低学年】

ICT機器の使い方に慣れ、投影された関連資料を基に関心を高めることで、教材の内容や本時のテーマを捉えることができる。

【中学年】

マーキングやイラスト、文章など、ICT機器を使って児童一人一人が自分の考えを表現し、共有することで、もの見方を広げたり、考えを深めたりすることができる。

【高学年】

ICT機器の多様な機能を使って、児童一人一人が自分の考えを具体的に説明したり、友達と比較して差異を話し合ったりすることで、友達との共通点や相違点に気付くことができる。

ICT機器活用の目標

3 公開研究会に向けて

令和4年度は、2年計画で培ってきた研究を公開することとなった。そこで、公開研究会に向けて指導案検討を始めると、「ねらいとする道徳的価値に迫れているか。」「中心発問は児童の考えを深めるのに有効か。」など、研究1年目には気付かなかった新たな疑問が生まれた。各研究部会において検討を重ね、ときには、講師の先生に指導案検討から参加していただき指導を受けた。そのような甲斐

があって、教員が自信をもって授業に臨めるような指導案が完成した。また、専門部会の教員が中心となって、児童のワークシートや授業研究会の様子など、研究の歩み分かる掲示物を作成したり、児童のアンケートをもとに変容を調査・考察したりして、研究の成果を分かりやすく伝えられるようにした。全ての教員がそれぞれの役割に沿って、研究の成果を公開するという目標に向けて一致団結して取り組むことができた。

私自身は、研究主任という立場ながら、長年道徳科を研究してきたわけでもなければ、ICTの技能に長けているわけでもない。しかし、本校には、道徳科主任や視聴覚主任、各分野におけるスペシャリストが多くいる。それぞれが得意な分野を生かして、力を発揮したからこそ研究が深まり、児童がよりよく生きるための学びを深める授業実践につながったと考える。それぞれの教員のもつ良さを、研究に向けてチームとして融合すること、トライ&エラーを繰り返しながら、目標に向かって着実に歩み進めていくことが、研究主任の大切な役割の1つだと感じた。

4 おわりに

2年間の研究の経過をまとめさせていたが、もちろん思い通りにいかなかったことも多々あった。そのような中、壁にぶつかったときに何度も何度も一緒に考え、答えに導いてくださった講師の先生方、そして常に前向きな姿勢で研究を支えてくれた本校の職員に感謝したい。

職員が各分野で力を発揮できる下地が整ったとき、学校はチームとなり、大きな力が生まれる。研究主任として、その下地づくりに関わったことは、自分自身の財産となっていることを実感している。



問いからはじめる探究授業

県立船橋高等学校教諭 かの菅野 ゆうじ裕司



1 はじめに

令和4年度から実施された高等学校学習指導要領において、「探究」が一つのキーワードとなっている。本校は、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、平成21年度から15年間の研究開発を終え、令和6年度から第4期の指定を受けた。第3期からは、SSHによる学校設定科目だけでなく、一般科目と探究活動の連携・連動にも重きをおいて取組を行ってきた。本稿では、理科（生物基礎・生物）を中心に、一般科目における探究的な取組の実践について紹介する。

2 視覚的なアプローチを用いた方法

探究活動の中で、最初に考えることは探究テーマの設定であるが、同時に最も難しい段階でもある。生徒の多くが、日常生活や授業で習ったことを元にテーマ設定を行う。そのため、普段の授業の中で、どのように疑問の種まきをしておくかが重要であるといえる。

生徒の探究心を刺激する1つめの実践は、視覚的なアプローチを用いた方法である。具体的には、授業の導入の際などに1枚の写真を見せ、そこから「問い」づくりをさせる。具体例として、生物基礎「植生と遷移」の単元において、熱帯の原生林と、ユーカリの植林が混じった写真（図1）を提示する。感じたことや考えたことをグループで共有し、疑問を挙げさせることで、原生林は階層構造が発達し、植林は単調な構造が続くことに着目するなど、自由な議論が展開される。生物の

科目において、「観察」は重要な意味を持つ。さらに、対話的な活動を通して他の生徒からの意見を聞くことで、見えていなかったことに気がつく。このように、観察を通じて疑問を持ち、そこから問いを立て、議論することで多角的な視点を得ることができるというこのアプローチ法は効果的であると考えている。

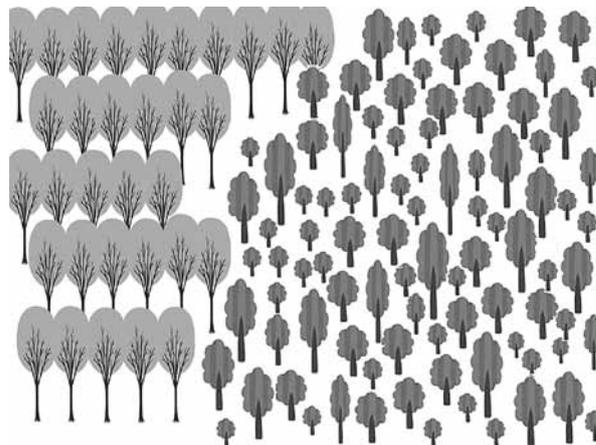


図1 森林のイメージ図（実際は写真）

3 実物から学ぶ

2つめの実践は、実際の生物の観察である。教室にとどまらず、校内・校外の調査を実施し、実際の植物等を観察する機会を設けている（写真1）。校内の植生調査では、グループごとに観察し、あらかじめこちらが提示した観察ポイントを調査させるとともに、自ら気づいたことをワークシートに記入し、最後に全体の感想・考察をまとめさせた。実際の生物を見て学ぶことによる効果は大きく、観察する力が磨かれる。グループ内での意見交換を行うことで、生徒の対話の中から教員が思いもよらない気づきや様々な疑問が生まれ、

それらが探究の種となっている。



写真1 校内の植生調査の様子

また、教室での授業では、生物にまつわるものを観察する機会をつくっている。生物の化石や種など長期保存できるものや、校内で採取してきた葉など様々なものを教室に持ち込んでいる。

以下、フタバガキの種を使った授業を紹介する。種子散布に関連してフタバガキの種を紹介し、2枚の羽根がヘリコプターのように回転しながら落下する様子を観察させる。そして、紙とはさみ、クリップを用意し、これらを用いてペーパーモデルを作成する課題を出す。意図としては、羽に見立てた紙の長さや、種に見立てたクリップの数を変えるなど、試行錯誤できる内容が特徴である（写真2）。

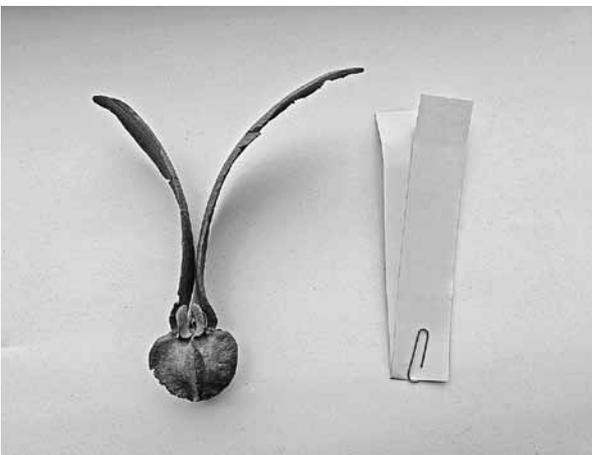


写真2 フタバガキの種とペーパーモデル

高校での探究活動では、場所や時間に制限があり、道具の準備にも時間がかかることから、モデル化することによるメリットは大きいと考える。

実際に、生徒は手を動かしながらグループ単位で試行錯誤を繰り返す。飛んでいる様子を観察し、その中で考えを巡らす。上手く飛ばない作品もあるが、飛ばない原因を考察することもできる。

4 研究者の視点から

3つめの取組は、過去の偉人や、現在も第一線で活躍する研究者の紹介である。授業の中で紹介しつつ、その研究結果だけでなく、着想に至った背景なども紹介し、身近な所にも発想のヒントがあることに気付かせる。人物像にも触れながら話をするすることで、研究者の存在を身近に感じさせる。輝かしい研究成果も、数々の挑戦を元に、次にどのような問いを立てるかが重要であることに気付かせる。また、生徒自身が研究者の立場になったら、どのように考えるか、といった問いを投げかけ、生徒に自由な発想をさせている。

5 おわりに

生徒の探究心を刺激する、3つのしかけを紹介した。毎時間の授業の中で、短時間でも探究のサイクルを意識して授業を組み立てるだけで、生徒の反応が良くなるという実感を得られる。何か一つでも考える「きっかけ」を与えれば、生徒は自然と考え、主体的に動き出す。課題を見つけて、「問い」を立てるには体験活動を通じた経験が重要であると考え。授業を通じて、生徒の印象に残る経験を多く積ませたい。生物を通じて育成した「観察し、問いを立てる力」が生徒の学びの広がりにつながることを期待する。



体育科学習の新たな可能性 ～異学年交流学習～



八千代市立勝田台小学校教諭 みやわき 宮脇 なおき 直紀

1 はじめに 研究主題「学級経営と体育」

勝田台小学校は永く「学級経営と体育」を研究主題とし、令和4年度には節目となる第50回公開研究会を開催した。「学級経営と体育」とは、日々の学級経営で培っていること（認め合い支え合う、子供と子供、子供と教師の人間関係や互いに気持ちよく学習できる規律など）を体育科学習で生かし、また、体育的活動（体育科や体育的行事など）の中で得られる喜びや経験などを学級経営に還元するという、双方向でアプローチする研究である。本校研究の全体講師である国士舘大学文学部教育学科の細越淳二教授によれば、「体育授業と学級経営の間に強い相関を示す」とある。（日本体育学会大会号（2004））

学級経営 ↔ 体育

その第50回公開研究会において、“異学年交流学習”と題し、私が担任する1年1組と当時の研究主任が担任する6年1組と合同で体育科の授業を実施した。異なる学年同士でどのように学習が行われたのか、1年生の学級担任の視点で振り返る。

2 実践単元「走り幅跳び（遊び）」

学習指導要領体育において、1年生としては「走・跳の運動遊び」、6年生としては「陸上運動」の領域で「走り幅跳び（遊び）」の授業を実施した。単元名は「いっしょにとびっこ大会！」である。学年が違えば当然目標や内容等は異なる。しかし、運動を楽しむこと

や、自分の記録に挑戦したり相手と競争したりする楽しさがあることなどに変わりはない。走り幅跳び（遊び）の特長を生かして単元を設定した。

〈1年生「走・跳の運動遊び」と6年生「陸上運動」の共通点〉

- ・調子よくリズムカルに跳ぶ楽しさや喜びを味わうことができること
- ・友達や相手のチームと競争する楽しさがあること
- ・自分の記録に挑戦し、跳んだ距離が伸びることで、自身の成長がわかりやすいこと

3 授業の様子

〈授業の始まり〉



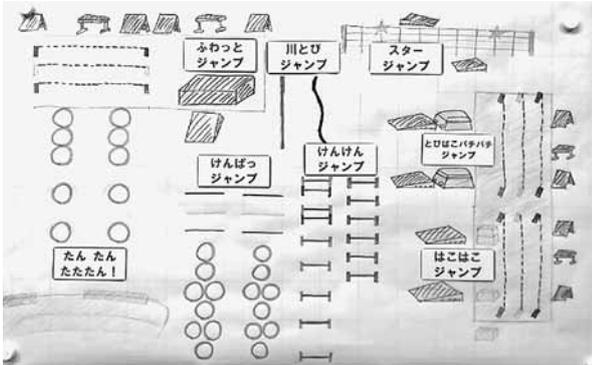
授業の始まりは学級ごとに集まった。前時の振り返りをしたり本時のめあてを確認したりした。1年生らしく元気に楽しく運動遊びをしてほしいと願い、笑顔で「がんばるぞー！おー！」と、学級に一体感が生まれるよう心がけた。

〈支える学習での“じゃんけんグリコ”〉



1、6年生混合で8チームに分けた。チームごとに仲良く元気に声を掛け合いながら、“じゃんけんグリコ”遊びをした。腕を大きく振ったり、リズムカルに跳んだりする運動遊びを楽しんだ。

〈基本学習を行う場の全体図〉



1年生、6年生共に運動（遊び）を楽しみ、技能を向上させられるような8種類の場を設定した。両学年に共通するめあては「スピードを落とさない踏切り」である。助走の勢いを生かしたり、片足で強く踏み切ったりする動きが生まれるようなサーキット学習を行なった。1年生にもわかりやすいように、親しみやすい名前前の場にした。1、6年生互いに声を掛け合いながら各場をローテーションして運動（遊び）をした。

〈“スタージャンプ” の場〉



学年に合わせて幅を変えてケンステップを置き、リズムカルに跳躍できるような場を設定した。リズムを言語化し、全体の共通語になるようにした。「たんたん たたたん」というリズムを想定していたが、ある1年生児童から「たたた たーん！」という音が生まれた。「魔法の言葉を見つけたね！」と声を掛けたときのとびきりの笑顔を今でも覚えている。

〈記録測定〉



チームごとに記録に挑戦した。踏切や着地の位置を見て、正確に計測することは1年生には困難だが、6年生のおかげで可能であった。跳躍のときに「たたた たーん！」と元気よく言ったり、応援したり、友達のために砂をならしたりするなど、1年生にできることを一生懸命に行なった。

〈“スタージャンプ” の場〉



1年生

6年生

目線を上げ、スピードを落とさず踏み切る技能を高めるため、高さの異なる“スター”を設置した。初めは、両足で踏み切ってしまう1年生の児童もいた。6年生の動きを見たり6年生から助言をもらったり繰り返し運動遊びをしたりすることで、力強く足の裏全体で「ドン！」と踏み切ることができると、高い位置の“スター”をタッチすることができていた。

4 おわりに

1年生は、自分たちよりも速く走り、高く遠くへ跳ぶ6年生の姿に自然と驚きや喜びの声を出していた。この子供たちが6年生になったときに、今度は自分たちがこのようなカッコいい姿を見せてくれることを期待する。



生徒の英語力を高める 授業を目指して



大網白里市立増穂中学校教諭 たかなし 高梨 かずき 和希

1 はじめに

生徒が学校で過ごす時間のほとんどは「授業」である。「授業が楽しければ生徒の学校生活は楽しくなる。」と初任校でお世話になった先輩教諭に助言をいただいた。楽しい授業とはどんな授業なのか、教員になったばかりの頃はよくわからなかったが、経験を重ねるうちに少しずつ自分なりの答えが見えてきた気がしている。私が思う楽しい授業とは、「わかりやすい!」「力がついてきた!」「私にもできた!」と生徒が実感できる授業である。英語が好きな生徒はもっと英語が好きになるように、英語にあまり興味がない生徒は「できた!」という経験を重ねて英語が好きになるようにしていきたいと考えている。今回はこれまで私が取り組んできた実践の中で、成果を感じているものをいくつか紹介していく。

2 帯活動の工夫 (2パターン)

(1) 2人組での1分間英会話

授業始めの5分間を使って、2人組での英会話を行っている。生徒には、1分間英語で話し続けること、正確に話すよりもとにかく英語を口に出すこと、相手の言っていることに反応する(あいづちを打ったり、自分の考えを伝えたりする)ことを大切にするように伝えている。会話の内容は既習事項の言語材料で表現できるように設定している。例えば、「過去形」について学習した際には、昨日したことや先週末にしたことをテーマに設定したり、「接続詞のthat」を学習した際には、

○○についてどう思うか、というテーマを設定したりしている。この活動は、既習事項の復習になるだけでなく、英語を即興で話す練習になったり、授業に英語の雰囲気を生み出すことができたりするなど、たくさんの利点があると私は思っている。

(2) 語彙力向上のための取組

英語力の向上には、生徒の「語彙力」の向上が欠かせないだろう。語彙力の向上は聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能全ての能力を上げることにつながるからである。私は生徒の語彙力向上を目標に、1つの単元に出てくる全ての単語、熟語が一目でわかる一覧表を作成し、それをもとに単語テストを実施している。一覧表は単語テストの1~2週間前に生徒に配付し、授業の始めの5分間を使って一覧表に載っている語句の発音練習をしたり、2人組でクイズを出し合ったりさせている。新出単語について指導する際には、まず発音(文字と音をつなげて覚えること)、次に意味(その文字・音と意味をつなげること)、最後にスペル(正しい綴りで書けること)の順で学習するように生徒に伝えている。この一覧表を使った帯活動により、生徒は新出語彙を繰り返し何度も見たり読んだりすることができる。加えて、生徒が家庭で単語を書く練習ができるように、学年フロアの廊下に練習用プリントを常設した。今では多くの生徒がこのプリントを活用して単語テストに向けて勉強するようになり、主体的に学習に取り組む姿が多く見られている。

3 授業デザインの工夫

(1)新しい言語材料を学ぶ授業

新しい文法や語法を扱う授業では、それらの使用場面を生徒に示すこと、そして生徒がそれらを実際に使っていく中で理解できるようにすることを心がけて授業づくりをしている。どうすれば伝えたいことを伝えられるのか、どんなときに今勉強していることを使うのか、といった学習の目的を生徒に理解させることで、生徒は主体的に活動に取り組むことができるようになると思う。教師による文法の説明や、黒板にポイントを板書する活動は、その授業のまとめとして行うことで生徒の理解が深まると感じている。まずは使ってみる。最後にポイントを解説したり、まとめたりする。この流れを大切にしている。

(2)問題演習

1つの単元を指導する中で、最低1時間は問題演習を行うようにしている。生徒が自分のペースで学習できるように、学習プリントは基礎、標準、発展レベルのものをそれぞれ用意し、取り組ませている。この際、生徒がどの程度学習内容を理解しているのかを確認するために、解き終わったプリントは全て回収し、丸つけをして1人ずつ個別に指導するように心がけている。本校の英語の授業ではチーム・ティーチングを行っているため、2人の教員で指導にあたることことができる。そのため、生徒を1人ずつ丁寧に指導することができる。また、問題演習の時間の最後には、間違いの多い問題について一斉に指導するようにしている。

4 大切にしている指導観

どんな授業であっても気をつけていることは「指導したことができていないか確認すること」である。例えば、指示したことを全員が

できているか、音読練習の際には全員が正しく音読できているかなど、確認することを大切にしている。確認の仕方は、指示したことができるまで次の指示を出さない、活動の成果を数人の生徒に発表させる、1人ずつ教員の前でパフォーマンスさせるなど、活動の内容によって様々である。また、指導したことができていなければ褒める、できていなければどができていないのか、どうすればできるのかを伝える、といった声かけも大切にしている。これは授業だけでなく、生徒指導や部活動指導でも同じであると感じている。

5 生徒による授業評価アンケート

単元末には、生徒が私の授業をどう感じているのかを確認するためにアンケートを実施している。「授業はわかりやすいか。」「声は聞きやすいか。」「英語力がついてきたと思うか。」などを4段階で評価させ、授業改善につなげている。また、授業に対する感想や要望を自由に記述できるようにし、授業改善に関する内容があればすぐに応えられるように意識している。生徒が授業を「楽しい」と思えるように、よりよい授業を目指してこれからも取り組んでいきたい。

Program1	当てはまる	当てはまらない
1 学習課題(今日の目標)が黒板に書かれていて、授業で何を学ぶかがよく分かった。	4 : 85.5% 3 : 14.5% 2 : 0% 1 : 0%	
2 先生の話し方は、はきははして分かりやすかった。	4 : 85.5% 3 : 14.5% 2 : 0% 1 : 0%	
3 先生の説明は、分かりやすかった。	4 : 79.0% 3 : 19.4% 2 : 1.6% 1 : 0%	
4 黒板の内容が分かりやすく、あとから見て内容が理解できるようになっていた。	4 : 80.6% 3 : 17.7% 2 : 1.6% 1 : 0%	
5 授業中、考える時間、話し合う時間、調べる時間、書く時間、など何をするかの指示がはっきりしていた。	4 : 82.3% 3 : 16.1% 2 : 1.6% 1 : 0%	
6 資料やプリント、教科書が工夫されていた。	4 : 79.0% 3 : 21.0% 2 : 0% 1 : 0%	
7 学習が楽しい、わかった、もっと知りたいと思う場面があった。	4 : 56.5% 3 : 35.5% 2 : 4.8% 1 : 3.2%	
8 分からないことがあったりつまずいたりしていることを、先生に伝えることができました。	4 : 46.8% 3 : 37.1% 2 : 14.5% 1 : 3.2%	
9 学力がついてきたと実感している。	4 : 37.1% 3 : 45.2% 2 : 14.5% 1 : 3.2%	
10 もっと英語ができるようになりたい。	4 : 72.6% 3 : 24.2% 2 : 3.2% 1 : 0%	
11 先生は授業中どのくらい英語を話していますか?	8 : 0%以上 : 13% 7 : 0% : 35.5% 6 : 0% : 27.4% 5 : 0% : 19.4% 4 : 0% : 1.6% 3 : 0% : 3.2% 2 : 0%以下 : 0%	
12 先生へのお願いがございましたら教えてください。	・テストで5点以上取れるようにしたい(3B28) ・練習をもっとお願いします(3B28) ・いろいろわかりやすくしてほしい(3B26) ・リスニングをもっと聞かせほしい(3A15)	